琉球大学学術リポジトリ

地域スポーツ経営に関する研究 (1) : 社会体育指導者を中心に

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2007-08-08
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 並河, 裕, Namikawa, Yutaka
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1357

地域スポーツ経営に関する研究（1）
～社会体育指導者を中心に～

並　河　　裕*

A Study on Management of Sports and Physical Recreation in Community (1)
～A Study on Leaders of Sports in Community～

Yutaka NAMIKAWA*

Abstract

Studies on Sports leaders in community have increased recently, but very few studies have been conducted on the factors affecting their activities. The purpose of this study was determined the factors infulencing sports leaders' guindance action in community. Analysis of data was made by Hayashi's Quantification Theory (Ⅱ), and (Ⅲ) which categories both a man and an item, and both quanitative and qualitative elements simultaneously.

Subjects were 134 adult people of both sexes (male 92 : female 42).

The results are summarized as follows :

1. The sports leaders who assume their practical leadership more often have following characteristics, compared with those who do less. First, the number of times asking for sports' guidance ; secondly, taking a course concerning sports, guidance ; thirdly, being conscious of long-life sports. The demographic elements which had highersimple correlation coefficients were exercise not so strong and dirrect influences and relations to sports' guidance action.

2. Multivariate statistical procedures were applied to examine correlation between sports leaders' motivation and their sport guidance action. Three patterns of sports leaders' motivation were found.

緒　言

今日、社会の変化に伴い生活水準の向上、余暇時間の増大、高齢化の進展等により、生活の中でのスポーツの果たす役割はますます重要性を帯びてきているといわれている[18]。さらに、スポーツ活動に対するニーズも多様化、高度化が進み、社会体育の普及・振興に関する諸問題も多種多様である。この様な状況の中、スポーツを文化として重要なものとして捉え、従来の健康の維持・増進のためのスポーツ活動のみならず、生活の充実に必要な運動文化（スポーツの文化化）として捉えることが今後のスポーツ振興には必要であると言う答申[11]がなされている。

体育・スポーツ経営の立場から地域スポーツの普及・振興についてみてみると、人々がスポーツを生活の一部分として充実した生活を送ることに貢献することは地域スポーツ経営の重要な目標と考えられる。すなわち、スポーツ活動に必要な運動施設（エリア・サービス）、運動仲間（クラブ・サークル）運動者に適したプログラム（プログラ

* Phys. Educ., Coll. of Educ., Univ. of the Ryukyus

ム・サービス）等の体育事業を運動者に提供することにより、人々がより充実した運動生活を送ることに貢献しようとするものである。また、それらの体育事業を提供する側（経営体）に関する問題もまた重要であり彼等の活動いんが地域スポーツ経営の成果を左右するといっても過言ではない。

本研究の究極のねらいは、地域社会における住民の体育・スポーツ普及の、振興を計るための地域スポーツ経営の在り方を総合的に研究することにあり、研究の対象としては体育事業に関する問題、運動者に関する問題、指導者に関する問題等を主な研究課題として取り扱うものとする。

今回は社会指導者に関する問題を取り上げることにする。アメリカにおけるプレイグランド運動の参加者において、その成功が指導者にかかっていることは実証済であり[13]、地域スポーツの振興・普及における指導者の役割は重要であると言える。

これまでの社会体育指導者に関する研究例としては、斎藤[16]、正ら[9]の体育指導委員に関する研究や、スポーツ指導員、トレーナー、コーチに関する研究[15]など、さらには、指導者の分類から彼等の活動状況を把握し、指導者の役割、機能を明確にしょうとしたものや[4][5]、運動者側から求められる社会体育指導者の能力・知識・指導活動を研究したもの[19]がある。しかし、これらの研究は指導者の実態調査であったり、指導者を個別に、あるいは指導種別に研究したものが多くこれらの社会体育指導にそぐわない面も多いと考えられる。

そこで本研究では、社会体育指導者の活動状況及び態度・意識等から指導者の指導実践に影響を及ぼす要因の分析を試み、社会体育指導者資格を持ちながら実際には指導実践に至らない行動に関与する要因を分析することによって社会体育指導者の有効活用をはかることを主な目的とし、さらには、指導実践を行っている指導者の社会体育指導に関わった理由をパターン分類することにより、社会体育指導者になる動機を個別の要因からではなく総合的な分析視点から把握しようとすることを目的とした。

研究方法

1．調査の概要

(1)　調査対象

対象として取り上げた社会体育指導者は、平成2年度沖縄県指導者バンクに登録されている指導者（867人）の中から無作為に343名を選んだ。（登録者の40%）

(2)　調査方法と時期

質問紙郵送法により平成3年10月～12月に実施した。

(3)　調査票の配布と回収

調査票の配布と回収率は、表(1)に示すとおりである。

表1　調査票の配布と回収率

	配布数（N）	回収（N）	回収率（%）
男子	162	98	60.4
女子	181	47	25.9
全体	343	145	42.2

（注）有効サンプル数134名、有効サンプル回収率39%

2．説明変数

金崎[1]は社会体育指導者の指導行動に影響をあたえる要因を社会的要因、主体的要因、環境的要因に分け社会体育指導者の指導行動を規定する要因を探ろうとした。また、藤田[2][3]らは社会体育指導者の研究において「説明モデル」として、基本的事項、運動経験、動機、活動の内容、指導のための学習と能力、指導者としての態度・意識等を設定して指導者の分析をおこなっている。本稿では、社会体育指導者の資格をもちながら指導実践に至らない原因を究明すること社会体育指導実践に影響を与える要因を分析することを目的としているため説明変数としては、基本的特性、運動経験、動機、指導者の態度・意識、指導者としての研究・学習意欲、指導者制度についての意見等を要因群として設定した。それぞれ変数（アイテム）及びカテゴリーの構成は表(2)に示した。

表2　分析に用いた要因群およびアイテム

要因群	アイテム
基本的特性	年齢
	性別
	学歴
	職業
	結婚
運動神経	学生の頃の運動経験
動機	資格を習得した理由
活動の内容	過去1年間の指導活動
	指導者のタイプ
	所有資格の種類
	指導可能なスポーツ
	依頼回数
	スポーツ団体との関係
	社会教育団体との関係
	自由時間
指導者としての態度・意識	やりがい
	報酬に関する
	指導のための知識
	指導する自信
	スポーツ技術
	指導能力
	生涯スポーツを意識する
	年齢者スポーツを意識する
	指導者の社会的知識
指導者としての学習意欲	研究・学習意欲
	スポーツ教室に参加する
	講習会に参加する
	望ましい指導者像
指導者制度	新しい資格を取得
	知識・技術を習得した場所
	指導者の資格に関する
	これまでの制度に不満
	指導者制度について

3．分析方法

データの分析にあたっては、定性的属性の多変量解析である数量化理論第Ⅱ類による判別分析を主要な方法として採用し、その外的基準は過去1年間に指導活動を行ったものをスポーツ指導実施群、指導活動を行わなかったものを非実施群とした。説明変数としては、分析上すべての変数を取り扱うことが出来ないためそれぞれの要因群から28アイテム（カテゴリー数＝115）を選んだ。

結果と考察

1．スポーツ指導実践と諸要因 ―クロス集計の結果―

表3は外的基準と諸要因とのクロス集計結果を示したものである。これらの結果から、まず、要因群別に外的基準つまりスポーツ指導実施群・非実施群とのクロス集計によるX^2検定の結果を要約する。

①基本的特性　外的基準に対して0.1%水準で有意差のみられたのは、年齢と結婚に、また5%の水準のそれは性別について認められた。指導者の年齢構成としては従来の調査報告[8]と同様に40代以上が多い傾向がみられた。

②運動神経及び動機　社会体育指導者の資格を取得した理由に0.1%水準で有意差が認められ、社会体育指導を実践している指導者は、地域社会に貢献したい、最初から地域に関わっていた、さらに体育・スポーツ・レクが好きだからという理由が指導を実践していない指導者よりも強い傾向がみられた。

③活動の内容　活動の内容については、1年間の依頼回数に0.1%水準で、社会教育団体との関係に1%水準で有意差が認められ、所有資格の種類、指導可能なスポーツ、スポーツ団体との関係については5%水準で有意差が認められた。指導実践を活性化させるためには指導者の資格のみならず社会教育団体及びスポーツとの関係を蜜にすることが強調される。

④指導者としての態度・意識　0.1%水準で有意差のみられたのは、指導する自信と指導能力及び指導者の社会的認知に、5%水準のそれは高齢者スポーツ意識するに認められた。指導する自信と指導能力とに関連して指導活動が社会的に認められることが社会体育指導実践に必要であると考えられる。

⑤指導者として研究・学習意欲　スポーツ教室に参加すると講習会に参加するに0.1%水準で有意差が認められた。スポーツ指導実施群が非実施群に較べ研究・学習意欲が高い傾向が認められた。

表3　外的基準と各要因とのクロス集計結果

要因群	アイテム	χ^2 値	df	P
基本的特性	年齢	24.53	3	＊＊＊
	性別	4.85	1	＊
	学歴	2.04	3	
	職業	11.72	9	
	結婚	11.14	1	＊＊＊
運動経験	学生の頃の運動経験	0.40	1	
動機	資格を習得した理由	27.81	10	＊＊＊
活動の内容	指導者のタイプ	1.46	2	
	所有資格の種類	29.88	16	＊
	指導可能なスポーツ	37.35	23	＊
	依頼回数	41.10	7	＊＊＊
	スポーツ団体との関係	6.04	1	＊
	社会教育団体との関係	7.40	1	＊＊
	自由時間	3.77	4	
指導者としての態度・意識	やりがい	5.63	4	
	報酬に関する	1.82	3	
	指導のための知識	8.54	4	
	指導する自信	20.74	4	＊＊＊
	スポーツ技術	3.00	4	
	指導能力	18.40	4	＊＊＊
	生涯スポーツを意識する	7.34	4	
	高齢者スポーツを意識する	10.70	4	＊
	指導者の社会的認知	23.33	4	＊＊＊
指導者としての学習意欲	研究・学習意欲	5.12	4	
	スポーツ教室に参加する	17.56	4	＊＊＊
	講習会に参加する	21.68	4	＊＊＊
	望ましい指導者像	1.43	5	
指導者制度	新しい資格を取得	1.28	4	
	知識・技術を習得した場所	4.11	4	
	指導者の資質に関する	3.83	4	
	これまでの制度に不満	2.73	1	
	指導者制度について	3.25	4	

＊＊＊…P〈0.001、＊＊…P〈0.01、＊…P〈0.05

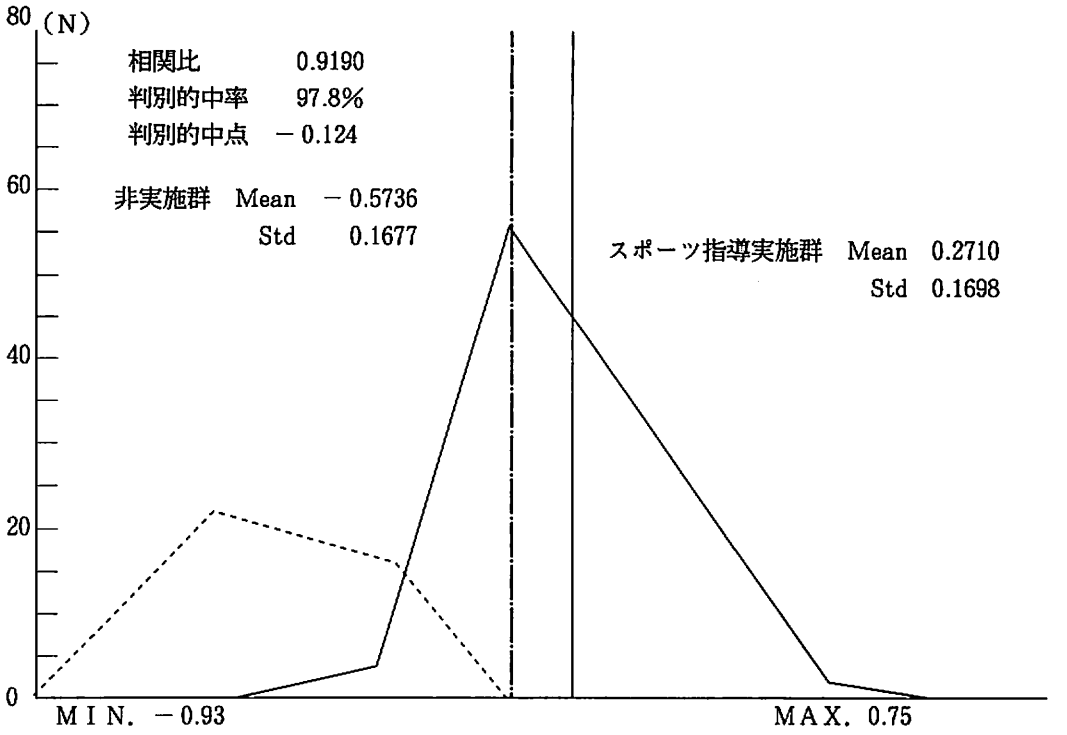

図1　スポーツ指導実施群・非実施群の判別グラフ

⑥指導者制度　これらの項目についてはスポーツ指導実施群と非実施群との間に有意差は認められなかった。

2．スポーツ指導実施・非実施の要因の分析

クロス集計により外的基準つまりスポーツ指導実施群・非実施群と諸要因との関連を考察してきたが、個々の要因と外的基準との関連を考察するだけでは諸要因間の相互作用などは無視されたり、いわゆる要因間の相関なのかその他の要因を媒介とした見せかけの相関なのか不明確である。これらの問題点を補うために数量化理論第Ⅱ類を適用して分析を試みる。

(1)　判別の精度

スポーツ指導実施・非実施に諸要因がどの様に関与しているか考察する前に、まず判別の精度つまり各要因が外的基準をどの程度判別しているかをみる。相関比は0.9190と非常に高く、このことはこれらの要因はスポーツ指導実施・非実施をよく判別していると言える。なお図1はサンプルスコアーの判別グラフを示したものであり、スポーツ指導実施群と非実施群との重複部分が判別を誤る部分である。サンプルスコアーの最大値は0.75最小値は−0.93で判別的中率は97.8%であった。

(2)　要因の関与度

各要因のスポーツ指導実施・非実施についての偏相関、カテゴリースコアー及びレンジ幅は図2—1、2—2に示される。

要因が関与する度合いをカテゴリースコアーのレンジ幅でみると、外的基準の弁別に最も寄与しているのは依頼回数で、次いで講習会等に参加する、生涯スポーツを意識する、研究・学習意欲、指導者制度について、そしてスポーツ教室等に参加する、やりがい、新しい資格を取得、職業、指導のための知識、の順序である。この結果を上述のクロス集計の結果と比較すると、X^2 検定で0.1%水準の有意差が認められた年齢、結婚がそれぞれ21位、24位に、有意差のみられなかった生涯スポーツを意識する（3位）、研究・学習意欲（4位）、指導者制度について（5位）と各々変化している。有意差の認められた要因で上位に（10位以内）位置づいているのは依頼回数（1位）、

要　因	偏相関	カテゴリー	カテゴリースコアー	レンジ（順位）
年令	0.2903	20代	−0.0886	0.2005（21）
		30代	0.1119	
		40代	0.0138	
		50代以上	−0.0443	
性別	0.0473	男	−0.0077	0.0246（27）
		女	0.0169	
職業	0.5859	教員・学校職員	−0.0650	0.6791（9）
		公社	−0.4617	
		公務員	0.1694	
		会社員・事務職	0.0992	
		会社・団体役員	0.2045	
		学生	0.2174	
		商工自営・自由業	−0.1971	
		主婦・無職	−0.0160	
		医療機関	−0.2118	
		その他	−0.3120	
学歴	0.6115	小・中学校	−0.2342	0.5384（11）
		高校・専門学校	−0.1552	
		大学・短大	0.1718	
		大学院	−0.3667	
結婚	0.2303	はい	0.0189	0.1684（24）
		いいえ	−0.1496	
運動部経験	0.3786	はい	−0.0414	0.2134（20）
		いいえ	0.1720	
得た知識・技術の場所	0.2830	研修・講習会等	−0.0155	0.2988（15）
		学校やクラブ等	−0.0223	
		独学	0.2454	
		地域・職場のサークル	0.2765	
		その他	0.0507	
報酬	0.3539	社会体育指導は奉仕	0.1403	0.2314（18）
		指導にあった報酬	−0.0911	
		指導の内容によって	−0.0102	
		どちらでもよい	−0.0562	
指導者タイプ	0.4016	競技中心型	0.0733	0.2205（19）
		地域中心型	−0.0753	
		両方	0.1451	
依頼一年間の回数	0.7344	0回	−0.2266	1.7450（1）
		1〜6回	0.0111	
		7〜12回	0.2921	
		13〜18回	0.2750	
		19〜24回	1.5184	
		25〜30回	0.6333	
		31〜36回	0.0224	
		37回以上	−0.0011	
スポーツ団体	0.0451	はい	0.0076	0.0237（28）
		いいえ	−0.0161	
社会教育団体	0.3307	はい	0.1397	0.1801（22）
		いいえ	−0.0403	
システム不満	0.1890	はい	0.0299	0.0872（26）
		いいえ	−0.0572	
自由時間	0.4338	非常にそうである	−0.0592	0.3950（14）
		そうである	−0.0516	
		どちらでもない	0.1534	
		そうでない	0.0073	
		全くそうでない	−0.2416	
やりがい	0.2592	非常にそうである	0.0128	0.7443（7）
		そうである	0.0088	
		どちらでもない	−0.0189	
		そうでない	0.0229	
		全くそうでない	−0.7214	

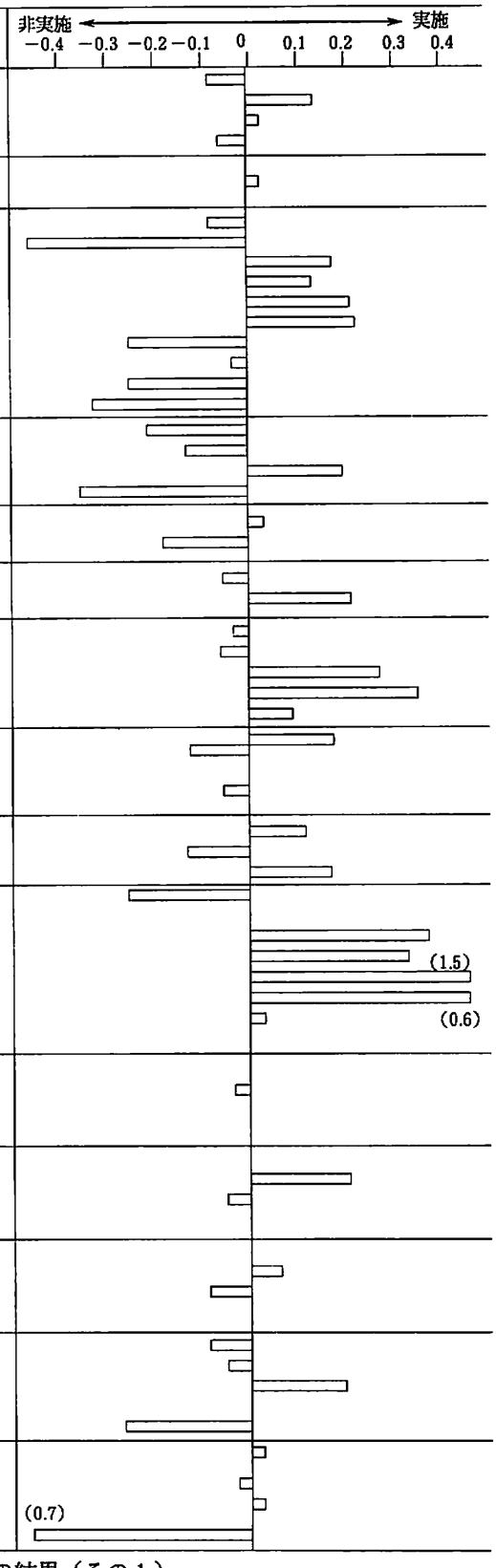

図２－１　要因分析の結果（その１）

要　因	偏相関	カテゴリー	カテゴリースコアー	レンジ（順位）
指導の知識	0.5449	非常にそうである	0.3303	0.6593 (10)
		そうである	0.0155	
		どちらでもない	−0.0199	
		そうでない	−0.3291	
		全くそうでない	−0.0471	
指導する自信はある	0.2878	非常にそうである	−0.0645	0.2776 (16)
		そうである	0.0082	
		どちらでもない	−0.0913	
		そうでない	0.1469	
		全くそうでない	−0.1308	
スポーツ技術はある	0.4889	非常にそうである	−0.1692	0.4727 (12)
		そうである	−0.0724	
		どちらでもない	0.2079	
		そうでない	0.0259	
		全くそうでない	−0.2647	
指導能力	0.3885	非常にそうである	0.1261	0.2618 (17)
		そうである	0.1000	
		どちらでもない	−0.0824	
		そうでない	−0.0775	
		全くそうでない	0.1795	
研究・学習意欲	0.5853	非常にそうである	0.2885	0.9070 (4)
		そうである	−0.0483	
		どちらでもない	−0.0823	
		そうでない	0.0243	
		全くそうでない	−0.6185	
新しい資格取得したい	0.6261	非常にそうである	−0.2140	0.6906 (8)
		そうである	−0.0079	
		どちらでもない	0.1089	
		そうでない	−0.1321	
		全くそうでない	0.4766	
スポーツ教室への参加	0.6535	非常にそうである	0.5248	0.7610 (6)
		そうである	0.0500	
		どちらでもない	−0.0539	
		そうでない	−0.2362	
		全くそうでない	−0.1363	
講習会への参加	0.7674	非常にそうである	−0.7182	1.0140 (2)
		そうである	0.1929	
		どちらでもない	−0.2974	
		そうでない	0.2130	
		全くそうでない	0.2958	
指導者の社会的認知	0.5774	非常にそうである	−0.0952	0.4555 (13)
		そうである	0.1381	
		どちらでもない	0.0281	
		そうでない	−0.3174	
		全くそうでない	−0.0951	
資質は大切	0.2723	非常にそうである	−0.0599	0.1508 (25)
		そうである	0.0533	
		どちらでもない	0.0909	
		そうでない	−0.0264	
		全くそうでない	−0.0180	
指導者制度について	0.3557	非常にそうである	−0.7626	0.8954 (5)
		そうである	0.0501	
		どちらでもない	0.0052	
		そうでない	−0.0465	
		全くそうでない	0.1329	
生涯スポーツ	0.5936	非常にそうである	−0.1950	0.9970 (3)
		そうである	0.0918	
		どちらでもない	0.1050	
		そうでない	0.0867	
		全くそうでない	0.8020	
高齢者スポーツ	0.1847	非常にそうである	0.0151	0.1772 (23)
		そうである	0.0116	
		どちらでもない	−0.0986	
		そうでない	0.0239	
		全くそうでない	0.0786	

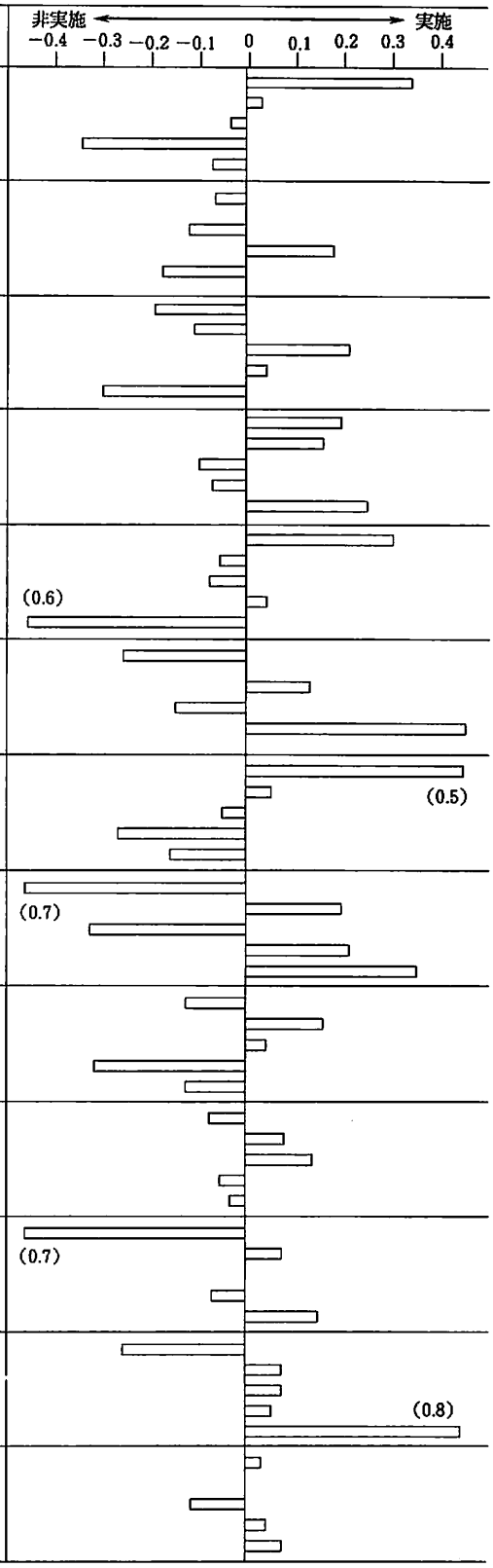

図2－2　要因分析の結果（その2）

講習会に参加する（２位)、スポーツ教室に参加する（６位）である。以上のことからスポーツ指導実施・非実施に寄与する要因として依頼回数、講習会等に参加する等の要因が特に重要と考えられ、基本的特性である年齢、結婚等は寄与する要因であるが規定力は弱く、諸要因の中で媒介変数として機能を果たしていると推測される。

次に、各要因のカテゴリースコアーの効き方と方向づけから、各カテゴリーがスポーツ指導実施・非実施にどの様な影響の及ぼし方をしているのかを検討する。

図２－１、２－２に示されるようにプラス方向に依頼回数「７回～30回の範囲」、生涯スポーツを意識する「全くそうでない」、スポーツ教室に参加する「非常にそうである」、新しい資格を取得「全くそうでない」、指導の知識「非常にある」、講習会等に参加する「全くそうでない」、研究・学習意欲「非常にある」、その他、マイナスの方向に指導者制度について「全くそうでない」、やりがい「全くそうでない」、講習会等に参加する「非常にそうである」、研究・学習意欲「全くそうでない」、職業「公社」、その他、などがあげられる。従って、プラスの方向につまりスポーツ指導実施に強い影響をあたえるのは、年に２～３回の依頼回数があること、研究・学習意欲を持ちスポーツ教室によく参加することであり。否定的な意見である生涯スポーツ意識する、新しい資格と取得、講習会等に参加する「全くそうでない」がプラス方向に影響している原因としては、日頃、指導実践に励んでいる指導者にとって講習会等に参加する時間的余裕がなく、また日常の指導に集中しているため指導に関する情報以外に目を向ける余裕がないのが現状であるためと推測される。逆にマイナス方向につまり非実施に強い影響を与えるのは、指導者制度はうまくいっていないと考えていること、やりがいを持たずに研究・学習意欲が弱いこと、講習会等によく参加することなどである。これらの要因がスポーツ指導非実施に強く影響を与えていることはさらに詳細な分析を要するところであり、今後の課題として新しい指導者制度の検討や講習会等の在り方及びその内容の再検討、さらに社会体育指導者へ動機づけ等が必要と考えられる。

３．資格取得理由のパターン分類の結果

ここでは、社会体育指導者の動機にどのようなパターンが存在するのか。それらのパターンに影響している要因はなにかについて考察する。そのために数量化理論第Ⅲ類を用いて、表４に示される社会体育指導者になった理由についてパターン分類を行った。

表４　社会体育指導者になった動機

１．社会奉仕のため
２．青少年の健全教育のため
３．体育・スポーツ・レクを広めたいから
４．指導するのが楽しいから
５．体育・スポーツ・レクを楽しみたいから
６．押しつけられてしかたなく
７．運動することが好きだから
８．一流選手やチームを育てたいから
９．過去の経験を生かしたかった
10．自分の趣味で
11．指導力を買われて
12．町づくりのため
13．健康・体力の維持増進のため
14．人間関係をよくするため
15．後継者づくりのため
16．その他

社会体育指導者になった理由について、数量化理論第Ⅲ類の手法によりパターン分類を試み、第３根までを算出した。指導者になった理由第Ⅰ軸、第Ⅱ軸、第Ⅲ軸における個々の数値は表５に示される。各軸に意味を求めると

第Ⅰ軸は、「その他」というカテゴリーと他のカテゴリーが大きく分離しており、社会体育指導者になった理由がはっきりしているものとしてないなものとに分かれている。「その他」というカテゴリーに理由がないのか他に理由が存在するのか今回は限定できないため意味の解釈は不可能である。

第Ⅱ軸は、プラス方向に健康・維持増進のため、町づくりのため、体育・スポーツ・レクを楽しみたい、運動することが好きだから、マイナス方向

表5　各軸におけるカテゴリー数値

カテゴリー	Ⅰ軸	Ⅱ軸	Ⅲ軸
1．社会奉仕のため	0.001072	−0.001712	−0.052872
2．青少年育成のため	0.009879	−0.023592	−0.093415
3．体育・スポーツ・レクを広めたい	−0.001609	0.024145	0.002843
4．指導するのが楽しい	−0.009136	−0.007883	0.059280
5．体育・スポーツ・レクを楽しみたい	−0.008993	0.031631	0.029428
6．押し付けられてしかたなく	−0.007905	−0.068988	0.036405
7．運動することが好きだから	−0.008751	0.030265	0.025615
8．一流選手やチームを育てたい	−0.009468	−0.167576	0.142873
9．過去の経験を生かしたかった	0.001867	−0.040327	0.004224
10．自分の趣味で	−0.009330	0.019048	0.037268
11．指導力を買われて	−0.006213	−0.157091	−0.020976
12．町づくりのため	−0.007600	0.031747	−0.018482
13．健康・体力の維持増進のため	−0.008266	0.040809	−0.001639
14．人間関係をよくするため	0.000245	0.020262	−0.002783
15．後継者づくりのため	−0.006444	−0.008344	−0.037008
16．その他	0.570424	0.015319	0.060075

に一流選手やチームを育てたい、指導力を買われて、押しつけられてしかたなく、過去の運動経験を生かしたかったなどが位置しているところから、第Ⅱ軸は「レクレェーション志向一競技志向」とを弁別するものであると推測される。

第Ⅲ軸は、プラス方向に一流選手やチームを育てたい、指導するのが楽しい、その他、自分の趣味でなどが集り、マイナス方向に青少年の健全育成のため、社会奉仕のため、後継者づくりのためなどが位置しているところから、第Ⅲ軸は「自己欲求充足一他人への奉仕」とに関係していると推測される。

図3はⅡ軸とⅢ軸のカテゴリースコアーを平面図示したものである。Ⅰ軸に関しては「その他」のカテゴリーが大きく影響していることからⅡ軸とⅢ軸を中心に考察を試みる。図3から、A、B、Cの3つのパターンが見い出された。パターンAは「一流選手をやチームを育成したい」、「過去の経験を生かしたい」、「押し付けられて」、「指導するのが楽しい」というⅡ軸の値はマイナスⅢ軸の値はプラスというパターンである。

パターンBは「青少年育成のため」、「社会奉仕のため」、「後継者づくりのため」、「指導力を買われて」というⅡ軸とⅢ軸ともにマイナスの値をもつパターンである。

パターンCは「運動することが好きだから」、「スポーツ・レクを楽しみたい」、「自分の趣味で」、「体育・スポーツ・レクを広めたい」、「健康・体力の維持増進のため」、「町づくりのため」、「人間関係をよくするため」、「その他」というⅡ軸はプラス値でⅢ軸はプラスとマイナスの値をもつというパターンである。

以上の結果をまとめると社会体育指導者になった動機には他人への奉仕と競技志向がまとまったパターンAと他人への奉仕とレクリエーション志向がまとまったパターンBとにわかれその間にパターンCというレクリエーション志向と自己充足型、他人への奉仕型がまとまった中間的パターンが存在すると考えられる。

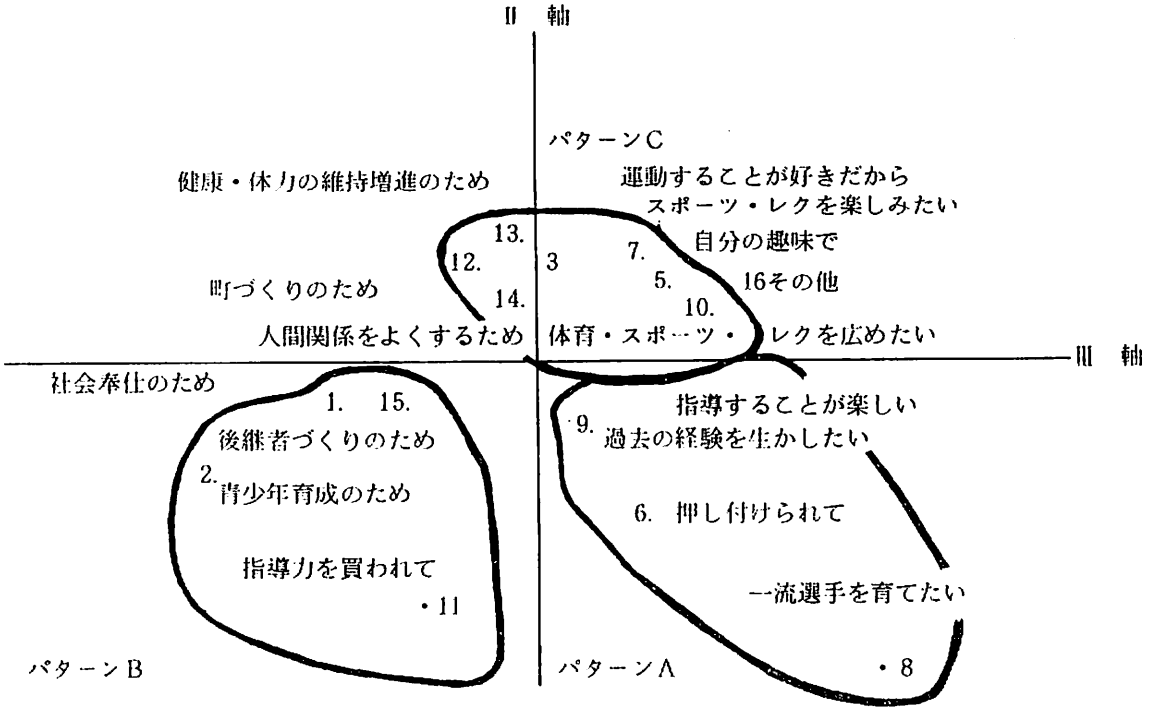

図3　動機によるパターン分類（数量化Ⅲ類）

要　約

社会体育指導者の指導実践に影響を及ぼす要因を明らかにするため、数量化理論第Ⅱ類による判別分析を採用し、指導者の基本的特性、活動内容、態度・意識、研究・学習意欲、指導者制度等の要因について分析し、さらに指導者になつた動機について数量化理論第Ⅲ類を採用しパターン分類を行ってきたが、結果を要約すると以下のようになる。

1．スポーツ指導実施・非実施に影響を与える要因を規定力順位で示すと、1年間の依頼回数が1位、次いで講習会に参加するが2位、生涯スポーツを意識するが3位、研究・学習意欲があるが4位、さらに指導者としての研究・学習意欲が5位であった。基本的特性である年齢や結婚はX^2検定による有意差判定では0.1%水準で有意差が認められたが、数量化理論第Ⅱ類による判別分析においては規定力は弱く、これらの要因はスポーツ指導実践においては媒介変数としての機能を果たしていると推測される。

2．カテゴリーの効き方と方向から見ると、実施群に強く影響を与えているカテゴリーは1年間の依頼回数「7回―30回」、生涯スポーツを意識する「全くそうでない」、スポーツ教室への参加「非常にそうである」であり、非実施群のそれは指導者制度について「非常にそうである」、やりがい「全くそうでない」、講習会への参加「非常にそうである」、研究・学習意欲「全くそうでない」等であった。なお、非実施群に講習会への参加「非常にそうである」が比較的強い影響力を示したことはさらに検討を要する問題であると考えられる。

3．動機によるパターン分析の結果、「他人への奉仕」と「競技志向」がまとまったパターンA、「他人への奉仕」と「レクリエーション志向」が

まとまったパターンB、「レクリエーション志向」と「自己充足型」及び「他人への奉仕」がまとまったパターンCが見出された。社会体育指導者になった動機をパターン分類すると、パターンAとパターンBのわかれ、中間にパターンCが存在すると推測される。

今後の課題としては、社会体育指導者の有効活用を計る上で、指導者組織の在り方つまり組織と指導者の関係を明らかにし、また講習会に参加することがスポーツ指導実践にマイナスに影響を与えているという結果についてさらに詳細に分析し、新しい指導者制度における講習会の内容や開催方法について研究を進めて行きたい。また、社会体育指導者になる動機に中間的存在と考えられるパターンがみられたことについて、それぞれのパターンの関連性を明らかにし、さらに社会体育指導者になる動機とスポーツ指導実践との関連性について研究を進めることにより、これらの地域スポーツ経営に貢献して行きたい。

参考文献

1）池田　勝、八代　勉、長久保賢（1979）体育・スポーツ指導者に対する地域住民の認知度知識度に関する調査研究、筑波大学体育紀要、2、pp. 15—21

2）藤田匡肖・その他（1975）社会体育指導者に関する研究〜三重県における社会体育指導者の活動の実態と意識の調査から〜、三重大学教育学部研究紀要、26—4、pp. 281—303

3）藤田匡肖・その他（1976）社会体育指導者に関する研究（第2報）〜三重県における社会体育指導者の種別による活動の実態と意識〜、三重大学教育学部研究紀要、27—4、pp. 311—331

4）金崎良三（1977）社会体育指導者の指導行動とその規則要因に関する社会学的研究、体育学研究、23—1、pp. 47—57

5）金崎良三（1976）社会体育指導者の条件・役割の検討、体育社会学研究、5、道和書院、pp. 84—106

6）片岡暁夫他（1974）スポーツ指導者のスポーツ指導の現状とその意識構造、日本体育学会第25回大会号、p. 657

7）木村国次（1974）大都市における社会体育指導者の現状と課題、日本体育学会25回大会号、p. 653

8）京都市社会体育指導員協議会（1983）京都市社会体育指導員意識調査、

9）正貞彦、野間口英敏（1972）体育指導委員の職務等に関する調査研究、東海大学紀要体育学部、2、pp. 1—12

10）松田秦定・東川安雄・荒井貞光（1978）スポーツ行動に関する実証的研究(3)〜スポーツ種目選択行動について〜、体育学研究、24—1、pp. 1—11

11）文部省体育・スポーツ研究会（1990）すぽーとピア21「21世紀に向けたスポーツの振興方策について」（答申解説）、株式会社体育施設出版、：

12）村上他（1966）わが国における体育指導委員の現状と問題点について、体育学研究、101—1、p. 120

13）㈶日本リレリエーション協会（1971）レクリエーション事典、不昧堂、p. 77

14）㈶日本体育協会（1976）スポーツ指導者の実態調査報告書、p. 52

15）山本英毅・中島豊雄（1976）新しい社会体育指導者像〜社会体育指導者の活動の実態と意識にかんする調査結果から〜、体育社会学研究、5、pp. 58—83

16）斎藤定雄他（1958）社会体育振興の方向性に関する研究〜体育指導委員の調査から〜、順天堂大学体育学部紀要、1—1、pp. 1〜13

17）竹之下休蔵（1965）スポーツの社会学、大修館書店、pp. 48〜51

18）竹之下休蔵（1972）プレイ・スポーツ・体育論、大修館書店、pp. 89—91

19）宇土正彦、八代　勉、中村　平、佐藤勝弘（1979）社会体育指導者に関する研究〜とくに求められる能力・知識・指導行動について〜、筑波大学体育紀要、2、pp. 1—14